

MINIATURE LIFE展

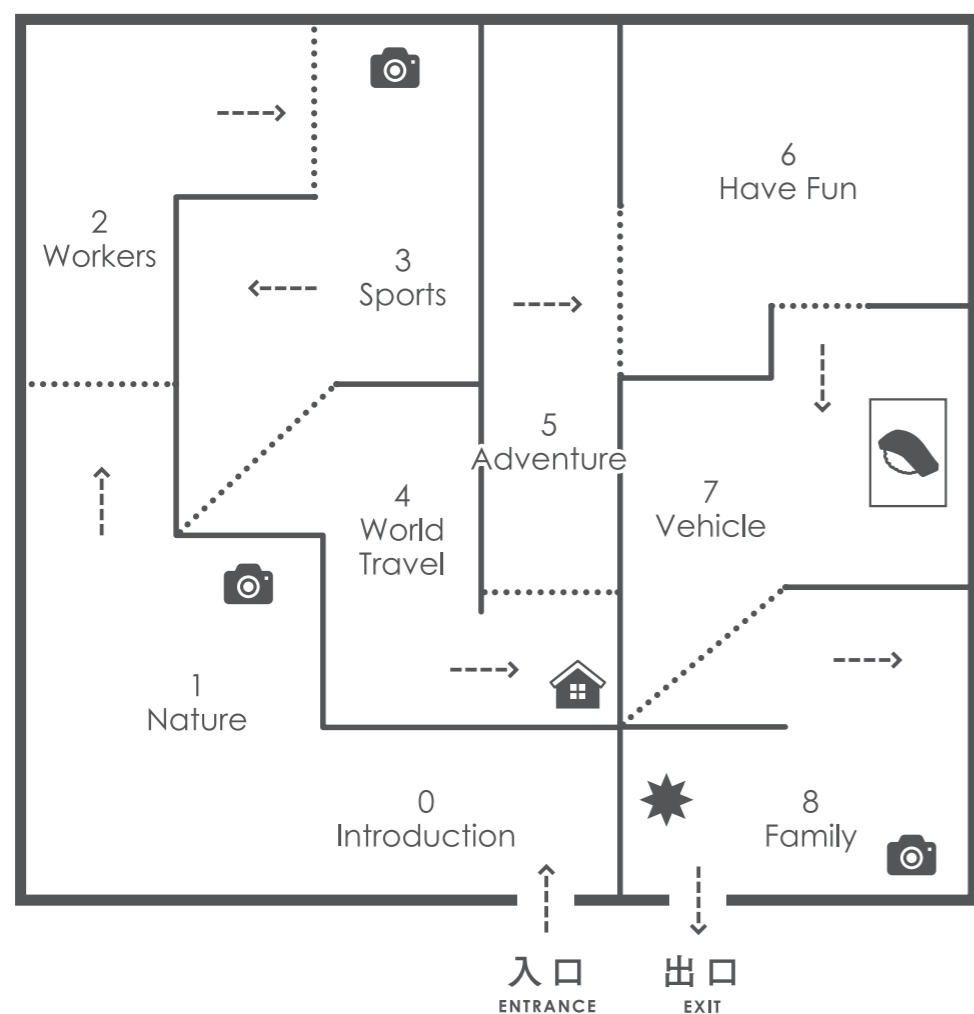
ミニチュアライフ

田中達也 見立ての世界

2

VENUE MAP / 会場案内図

-  フォトスポット
-  動くミニチュア作品
-  熊本展限定の新作
-  田中達也アトリエ再現



PROFILE / プロフィール

田中達也
TATSUYA
TANAKA

ミニチュア写真家・見立て作家。1981年熊本県生まれ。
2011年から日用品とジオラマ用人形をモチーフにして、日常にある物を別の物に見立てたアート「MINIATURE CALENDAR」をインターネット上で発表し、現在もお毎日更新・新作を発表。2017年、NHKの朝ドラ「ひよっこ」のオープニング映像で一躍注目を集める。田中のInstagramのフォロワー数は270万人を超えており、SNSという新しいメディアと時流にフィットした最新の表現者のひとり。
公式ホームページ<https://miniature-calendar.com/>

MINIATURE LIFE展

ミニチュアライフ

田中達也 見立ての世界

2

2021 / 1 / 29 FRI — 2021 / 3 / 14 SUN

鑑賞時の おねがい	<ul style="list-style-type: none"> ● 会場内の作品は大変デリケートです。展示ケースを含め、お手を触れないようお願いいたします。 ● 会場内の作品はすべて撮影OKです。ただし、フラッシュの使用は作品の劣化防止を目的として禁止します。 ● SNSでのシェアOK! SNSのタグ付けをお願いします。 #ミニチュアライフ展
--------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

熊本市現代美術館

試論「田中達也の秘密解明」 富澤治子

田中達也の作品の面白さについて述べようと思う。「そんな、見ればわかるよ!」と思う人も多いかと想像する。しかし本当に面白いものは、追究すると更に面白くなる、ということをごさんご存知かと思う。そもその田中達也が名乗るところの「ミニチュア写真家・見立て作家」に、その面白さの秘密を読み解くための最初のカギがある。以下より、キーワードごとに解明を行いたい。まずは「ミニチュア」と「見立て」である。

「ミニチュア」と「見立て」について

世の中に存在する色々なサイズの物体がとても小さく作られている。サイズが激変しているのに細部まで精巧に作られているのが面白いし、スマホのカメラをかざした途端、それがディスプレイ上でリアルに見える変化が面白い。

田中はミニチュア特撮が好きで、当館に「館長庵野秀明 特撮博物館展」(2015)を見に来てくれたという。その展覧会の重要人物のひとり、特撮美術監督の三池敏夫(熊本出身)もかつて言っていた。「カメラのフレームに収めた時にそれが本物のように見えるのが大事。なので、ミニチュアセットの照明も背景も大事。」

田中の写真作品は、日用品とジオラマ用人形をセットに用いる点で、ミニチュアという言葉だけでは説明不足である。例えば、《綿棒なことになったぞ。》(図1)に登場する街灯らしきものはミニチュアの街灯ではなく、綿棒である。しかも、街灯により近づけて見せるためにシルエットを強調する照明である。背景には使いさしの綿棒ケースもあって、綿棒であることを強調する。田中がミニチュアの面白さに足したものの、それが「見立て」である。

さて、日本特有の文化である「見立て」とは、何だろうか。視覚的約束ごと(trope)であり、——視覚的転位(visual transposition)、AをAとして見ながら、Bとしても見ること——¹である。文化人類学者山口昌男の次のような説明も参考になる。



図 1

「見立て」にはすりかえ、うつしかえがあるのです。似ているということを手がかりにして、それを違った形にうつしかえる。一方、比喩というのは、コンテキストの中で、周りとの関係によって意味が変わるような装置ですが、「見立て」は、似ているところを残しながら、形を全部変えてしまっ、距離感をつくりだすようなところがあると思います²。

《綿棒なことになったぞ。》に当てはめると、(サイズが極端に異なる)街灯と綿棒のシルエットが似ていることだけを手がかりにして、折り曲げた綿棒を、綿棒として見ながら、街灯としても見ることが「見立て」である。一方、背景のケース内の綿棒は、日用品の綿棒のままでの登場である。

この「見立て」の面白さに更に田中が足したものの、それは作品タイトルで行う「もじり」である。《綿棒なことになったぞ。》、これはパトカーが登場していることからすぐ予想がつくように「面倒なことになったぞ。」のもじりである。この「もじり」も日本特有の文化である。

「もじり」の効いた作品タイトル

「もじり」は、日本語ならではの言葉遊びなので、特別な才能がなくても容易にできるものである。(中略)「もじり」は、読者が日本語を楽しむ「場」であり、「読み人」が「詠み人」になるという前近代日本文学の受容の特徴を示しているのだ³。

さて、改めて述べると、田中の作品は、ジオラマ用人形と日用品で作出す「見立て」で構成される、ある種の日常風景のミニチュア写真作品である。作品に表現した世界について、鑑賞者に作家の意図を伝える役割を担うのが作品タイトルであり、田中の場合は「もじり」が効いている。

《泡は夜更け過ぎに雪へと変わるだろう》(図2)という

作品がある。このタイトルは、毎年クリスマスシーズンになると、必ず耳にする山下達郎の名曲「クリスマス・イブ」の歌詞の始まり、「♪雨は夜更け過ぎに雪へと変わるだろう」をもじったものである。田中がこの作品タイトルで行う「もじり」は、「雨(あめ)」と「泡(あわ)」の一文字違いで、誰もがすぐ分かり楽しめる。もちろん、現実世界では泡が空から降ってくることはないので、そこがフック(引っ掛かり)となる。作品をよく見てみよう。泡で出てくるハンドソープのボトル(日用品)のふもとには、泡にほぼ埋まったミニカーが4台と、シャベルを持ったり、ワゴンを引くなどのポーズのジオラマ用人形が数体配置される。作品タイトルを読まずに見ると、ともすれば泡洗車に関する出来事に見えないこともない。

田中は、この泡とハンドソープのボトルが主役となる世界に、作品タイトル「泡は夜更け過ぎに雪へと変わるだろう」を添えることで、鑑賞者を誘導する。誘導する先は、泡を泡として見ながら雪として見ること、さらにはセットの照明の明るさから、大雪後の翌朝の風景であるとの「見立て」を成立させることである。

既存の泡と雪の日本語ならではの関係と言え、**「泡雪(あわゆき)」**という季語(春)や、「泡雪」という和菓子もそうだが、儂くすぐ解ける様子を喩えるものである。この作品の雪は、「泡」で演出されるゆえに、水で流せばぱっと消える「泡雪」である。さらに、作品タイトルがもじった、この歌の持つイメージによって「軽み」は加速する。時代にフィットした日用品(ハンドソープは元々現代的なアイテムだが、いまやコロナ禍を象徴するもののひとつ)を用いている点にも今っぽい新しさを感じる。



図 2

「もじり」の面白さに更に田中が足したものの、それは「新しさ」である。その「新しさ」は、作品(イメージ)と作品タイトルが組み合わせることで生まれる。

作品(イメージ)と作品タイトル(テキスト)の交差から生じる「新しさ」

《よそ者へは塩対応》(図3)を見てみよう。「塩対応」という新しい日本語が

キーワードである。作品タイトルで「塩」と示されるゆえに、作品で砂浜を演出する白い粒は砂糖でなく塩である。日用品として木製ソルトミルが登場することからも決定される。

この作品のテーマは「#World Travel」、この作品では「冒険」と解釈できる。冒険者がたどり着いた南の島の砂浜に上陸するシーン、ボートに乗った2人の訪問者は武器を持たず欧米風の着衣で、島で迎える3人は豪華な頭飾りと腰巻を着用と、服飾文化もかなり異なる人達のファーストコンタクトである。巨木で出来ているような大きな宮殿の、通路から出てきた3人は護衛兵だろうか、2人は大きな槍を持ち、1人は臨戦態勢で剣を握っている。護衛兵たちの訪問者に対する態度が「塩対応」という訳である。

冒険譚は古くから愛されてきたし、田中は、映画「スターウォーズ」、漫画『ドラゴン・ボール』、TVゲーム「ファイナルファンタジー」などの数々の名作に触れて育った世代である。今は21世紀も20年経ち、我々の冒険とはアバターを纏いオンラインの世界で行うのがメインとなったが、見知らぬ島への漂流、冒険への憧れは、多少の古臭い香りがすると、そのロマンティックな魅力は消え去ることが無い。

ここで確認しておきたい。田中が作り出す世界には、世の中の乱れが原因で起こる弱者の犠牲や悲惨さが存在しない。現実だとしたらこうはいかない。我々の時代の漂流とは、EU諸国で受け入れについて大揉めしていた地中海に船出した難民達のような過酷すぎる船旅であり、受け入れる側も国境侵入者に対し護衛艦から発する警告に緊張が走るような事態である(国内でも日本海側は拉致問題が深刻な影を落としている)。そして全世界で流行するコロナ禍により、九州に住む我々も県境を越えることにすら一考を要する。海外旅行は夢のまた夢である。

乱世には、ファンタジーが流行るそうだ。ワクワクするような冒険のイメージに「塩対応」という言葉を添えるところに、ミニチュアと見立てで生み出したファンタジーに「現代」のフレーバーを加味するところに、田中は「新しさ」を表現するのである⁴。

さいごに

ここまで田中達也の作品について、いくつかのキーワードから読み解いてきた。

最後に、熊本に江戸時代から続く市民文化「つくりもん」との田中の作品の関連性について述べたい。「つくりもん(つくりもの、造り物と



図 3

も呼ばれる)」は熊本に限らず全国にあるが、県下では高森町の風鎮祭、山都町の八朔祭、宇土市のうと地藏祭りが有名である。うち、高森と宇土の「つくりもん」は、生活雑貨や日用品を素材にした「見立て」で、話題の人物やキャラクターなどの大型の立体造形作品(軽トラの荷台サイズや個人宅の駐車場を埋めるサイズ)を個人や町内で何日間かかけて作って発表する。ここで注目したいのは、祭が終わるとそれらは速やかに解体される、ということである(高森は、解体し元通りに使えるようにするのがルール)。

この立体造形の制作にあたり「既製品を使う・解体する」という手法は、「つくりもん」の世界では一定のことだが、日本近代彫刻史においては1960年代後半からの動向として「彫刻」の概念が解体されていくなかで、齋藤義重(1904-2001)が先駆けとして到達した手法であり、その前衛的な考え方「既知の芸術的媒体と形式の決定的な否定」⁵の表れである。

さて、田中は作品制作にあたり、アトリエに様々な種類の日用品・食品サンプルや、様々なサイズのジオラマ用人形を大量に保管しており、そこから選んでセットを組み、毎日作品を撮影しては解体している(その様子の動画も田中のホームページで毎日公開される)。田中が完成作品をバラすのは、「つくりもん」や現代日本の立体造形を思うと自然なことであり、「写真家」としてセットを作りそれをバラすのも写真家としては一定のことである。

田中が「見立て作家」で「ミニチュア写真家」であると名乗り、「見立て」や「もじり」など前近代からの日本文化独自のものの見方を活かして制作した作品を、「日本の美術および美術業界」という既存の枠組みに囚われずに、鹿児島からSNSを通じて毎日世界に発信する、その考え方ややり方はまさに今っぽい新しさを持つ。

ここでようやく全ての解が出そろった。「ミニチュア写真家・見立て作家」というユニークな名乗りは、ユニークな表現者としての非常に現代的で筋の通った田中達也のワンアンドオンリー宣言なのである。

【とみさわ・はるこ、熊本市現代美術館学芸班主査・学芸員】

注

- 1.ハルオ・シラネ「めかし／やつしーパロディ・見立て・「瀟湘八景」」、ツベタナ・クリステフ編『パロディと日本文化』、笠間書院、2014年、47-48頁。
- 2.高階秀爾『日本の美を語る』2004年、青土社、142頁。
- 3.ツベタナ・クリステフ「「はじめに」に代えてー果たして「パロディ」とは?」、前掲注1、『パロディと日本文化』、20頁。
- 4.筆者は次の一文にインスピレーションを受けた。「テキスト(狂歌)とイメージ(版画)の双方に、過去を響かせるとともに、その時代の新しさを表現するような予期せぬひびきが存在しているのである。」ハルオ・シラネ「めかし／やつしーパロディ・見立て・「瀟湘八景」」、前掲注1、『パロディと日本文化』、50頁。
- 5.黨科英也「「反対称」について」、「齋藤義重展」展覧会カタログ(岩手県立美術館、千葉市美術館、鳥根県立美術館、富山県立近代美術館、熊本市現代美術館)、2003-2004年、233頁。

図版注

- 図1：図録『MINIATURE LIFE展2』NHKサービスセンター、2020年に掲載。図録掲載番号#Workers No.7。
図2：田中達也『MINIATURE LIFE 2』、水曜社、2016年に掲載。
図3：図録『MINIATURE LIFE展2』、前掲書に掲載。図録掲載番号#World Travel No.11。